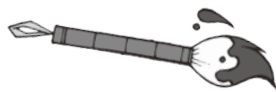


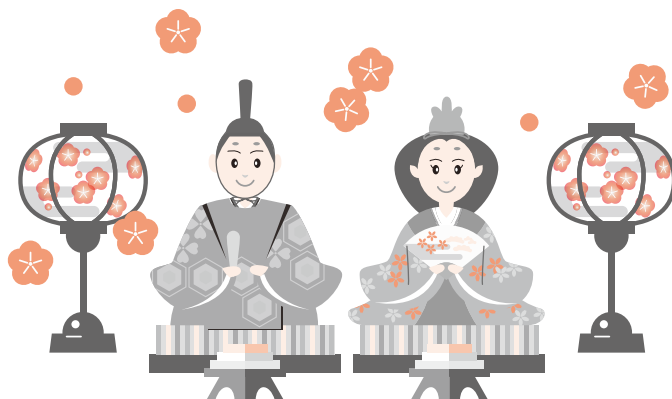
新・下野市風土記

ひな祭り



下野市教育委員会 文化財課

毎年2月の後半頃になると、ひな祭りの雛人形を飾る際に、「お内裏様（男雛）は、右側と左側、どっちだっけ？」という言葉が聞かれることと思います。現代のお雛様飾りの多くは、向かって左側に男雛を置いているようですが、この配置のしかたは、昭和3(1928)年に執り行われた昭和天皇即位の大礼時の、天皇・皇后の御座の位置に倣ったもののようです。それ以前の江戸時代や明治・大正期に描かれた雛人形飾りの図などでは、現在とは逆に男雛が向かって右、女雛が左に配置されているものが多く残されています。これは、飛鳥時代に隋（後の唐、現在の中国）や朝鮮半島の国々から伝来し、日本風にアレンジされた「大宝律令」（「律



令」とは法令のことです）に決められた官僚の序列から引き継がれたとされる配置（席順）で、例えば大臣は右大臣がトップ、左大臣がそれに次ぐ、といったような「右側の方が上」という考え方に即したものでした。時代によって、雛の配置も変わるようです。

そもそも、3月3日の上巳の節供（節句）に雛人形を飾る、現代のような形のひな祭りが行われるようになるのは、いつ頃からなのでしょう？

民俗や風俗史の研究によると、江戸時代の前半の貞享年間(1684~88)に、日本橋周辺の中橋、尾張町一丁目、十軒店、人形町（現在の中央区）や麴町四丁目（現在の千代田区）周辺では、2月27日から3月2日までの期間に雛人形を売る雛市が立つようになったので、ひな祭りが普及したという説があります。

その後、江戸時代末期の天保年間（1830~44）には、浅草茅町、池之端仲町、牛込神楽坂上、芝明神前などにも雛市が立ち、同時期に記された「東都歳時記」には、『街に仮屋が建ち並び雛人形や雪洞、屏風などを商っている。これを求める人、昼も夜も道にあふれていた。中でも十数店舗が繁盛している。内裏雛は寛政の頃、

江戸の人形師の原舟月という者が工夫して作り、古今雛と名付けた』と記されています。

また、同じく天保年間に記された『江戸名所図会』にも、畳を敷いた草葺きの仮屋に、箱に入れた内裏雛と雛飾りを並べた店舗と、行きかう人々が描かれています。

このような雛市は、江戸のほか京都では四条、大坂では御堂（東西本願寺別院）前にも出店され、大都市から周辺に広がった風習と想定されています。京都の博物館や祇園の花柳界には、代々大切に継承されている雛人形があるようです。

その後、豪華な段飾りなども普及しますが、これらが庶民に普及するのは昭和初期以降といわれています。

人形の顔立ちや衣装のデザインも、時代と共に変化してきました。江戸初期には、紙で作られた立ち雛や、粘土で作られた土雛もありました。

引用参考文献 小川直之 2018「雛人形と桃の節供」『日本の歳時伝承』角川文庫